

ラテン語による思索のはじまり

1 アウグスティヌス以前のラテン教父

キリスト教の思想的営みははじめはギリシア語でなされていた。
なかなかラテン語で精確に言い表すようにならなかった。
例えばニカイア信条のラテン語ヴァージョンは、父と子が同じく
神であることをラテン語で表現しただけではまず、
ギリシア語では「ホモウシオス」となると補足せざるをえなかった。

..... unius substantiae cum Patre, quod Graeci dicunt homoousion

ローマでも典礼用語は、3世紀半ばまでギリシア語であったという。
そういうなかで、ラテン語で思索するキリスト教思想家がだんだん
でてくる。
北アフリカ生まれのキリスト教思想家群がめだつ。

1.1 Tertullianus

c.160 —222/3

カルタゴ生まれ

弁証・修辞・法律の教育を受け、ローマで法律家として活躍。やがて改宗し
(196頃)、カルタゴに帰り司祭となる。

De praescriptione haereticorum (c.200)

異端は哲学によって養育される / ゲノーシス派と哲学者とが問題にするのは
悪の起源だ / といったような哲学に対する否定的態度がある。

アテナイとエルサレムとの間に、アカデミアと教会との間に、何の関わりがあるか。
ストア派とプラトンとアリストテレスとから合成された雑色のキリスト教を
造り出そうとする試みは一切止めてしまわねばならない。イエス・キリストの後には
詮索する必要はなく、福音の後には探究する必要はない

ここには、先に使徒行伝から描いてみたのとは別のパウロの面を連想させる
態度がみえる——

ユダヤ人は徴をもとめ、ギリシア人は知恵を求める。

しかし私たちは十字架に付けられたキリスト——ユダヤ人には躓き、異邦人に
は愚かである者——を宣べ伝える。彼は

信じる者にとっては——ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと——

神の力、神の知恵たるキリストなのだ (第1コリント1章22-)

と発言した時、
パウロは、知恵を求める営みとしての哲学を福音とは異なる方向に向かうものとして
見ていたといえようからである。

Adversus Praxean (213/18)

テルトゥリアヌスは法律家の眼で見ており、法律家の発想でキリスト教の教えを理解しようとしている。

例えば、trinitas は3つの persona が1実体 (una substantia) ないし資産を共有する、ということだという。

また、神を絶対君主のように看做す考えがあり、徳は神の法に対する服従であり、その動機は刑罰への恐れである、神の掟に服従すべきなのは、それが善であるというより、それを神が命じたからだ、などとし、信条を信じなければならないのは、それが真であるが故ではなく、命じられているから、として無条件の服従を主張した。その線上に次の有名なことばもあるのである。

De carne Christi (208/11)

神の子は死んだ。それは不合理であるが故に全く信すべきである。彼は葬られ、よみがえった。それは不可能であるが故に確實である。

のちに教会から離れた。世俗化、制度化しつつあったローマ教会に不満だったという。

1.2 ラテン教父たち

Cyprianus (200/10 — 258)

Arnobius (—c.377) この人もやはり人間理性を攻撃する議論をした。

Lactantius (c.240 — c.320)

Divinae Institutiones (305/10)

これは体系的著作であって、コンスタンティヌス帝に献げられた。迫害時代のおわりを示す著。

キリスト者のキケロ。

ローマ世界の哲学と宗教について、両方の欠陥を満たすのがキリスト教——哲学的宗教にして宗教的哲学——だとした。

Ambrosius (c.337 — 397)

Lactantius につづく流れに位置する。

若くしてミラノの執政官、374 ミラノ教会の司教。

法律家としての教育を受け、後に神学研究。人格的影響をアウグスティヌスに与える。

ギリシア語に通じ、アレクサンドリア学派から比喩的解釈を学ぶ。

罪・恩恵についてはテルトゥリアヌスに従う理解を示す。

De officiis ministrorum (聖職者の義務)

キケロの義務論に従って立論。それとキリスト教倫理の異同を明らかにする。これは中世を通じてキリスト教倫理の公認の手引きとなった。

Hieronymus (c.342 — 419)

アクィレア近郊の生まれ。

聖書のラテン語訳 (382 開始—404 頃完成) は *editio vulgata* として有名。

従来もラテン語訳はあったが、H は福音書を大改定し、旧約はヘブル語から訳し直した。

はじめはあまり認められなかったが、やがて評価が高まり、中世西方教会の聖書となった。

2 Augustinus

2.1 生涯 (AD354 — 430)

北アフリカ・カルタゴ近くのタガステの生まれ。

Confessiones (397–400) を骨子として生涯を辿ると：

母モニカはキリスト教徒。「母の乳とともにキリストの名を吸い込んでいた」

19 オカルタゴ遊学中、キケロの *Hortensius* (哲学を修辞学・弁論術に優るものとして勧める) を読み、*philosophia* — 知恵への愛 — に目覚める。

そこでキケロの同著にはキリストがでてこないのが不満に思い、聖書に眼を向けるが、失望。

マニ教 (真正にして合理的なキリスト教と自称) にすすむ。

やがてその世界の合理的説明の怪しげなところを悟って離れる。

376—カルタゴで修辞学を教える。

386 ミラノ (*conf.V,xiii,23*)

新アカデミア派の懐疑論に傾く (*conf.V,x,19*)

アンブロシウスの説教を聞いて、心服 (*conf.V,Xiii,23—*)。

マニ教を不合理とする。旧約の記事が比喩的解釈によって説明されることを教えられて、キリスト教に対する誤解に気付く (*conf.V,xiv,24*)

プラトン派の書 (プロティノスらしい) を読む——神を物的光としてでなく、霊として知るようになる。

だが、実践的には古い意志と新しい意志の葛藤あり。

「取れ、読め」— 聖書ロマ書 13,13–14 「宴楽、酔酒に、好色と淫乱、争い、妬みに歩むべきではない。ただ主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために備えるな」を読み、最終的改宗。

ミラノ郊外カッシキアクムの山荘にいき、受洗に備える。ここで哲学的議論をする (哲学的対話篇、*soliloquia*)。

387 ミラノでアンブロシウスから受洗。母モニカとともにアフリカに帰ろうとするが、母死す (*conf.IX*)

タガステに帰り、修道生活。

391 ヒッポの司祭——396 司教 (このころ *De trinitate*)

34 年間、司教、異端に対する論戦 (マニ教、ドナトゥス派、ペラ

ギウス派¹

カトリック教会の権威の確立に効あり。

410 ゴート王のローマ攻略。この災難は神々をすてて、キリスト教を信じた
報いだとする非難に対して *De civitate* 22 巻。

2.2 探求の態度

Confessiones 冒頭

quia fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum, donec requiescat
in te.

告白は神に対する告白。神との対話でもある。

「アナタ」と呼び掛け得る神が、Aug. の神。

quaeram te, invocans te et invocem te credens te.

第1巻は少年時代を振り返っての告白。

アウグスティヌスの言語習得

7- : アウグスティヌスの記述する立場

誕生以前	胎児以前	ante hanc	: nescio	誰も知らない
	胎児期	in matris utero	: (non memini)	聞く・妊婦を見る
幼児期	infantia		: non memini	聞く・幼児を見る
子供期	pueritia		: memini	記憶、反省

* 幼児期の私について「私はこうだった」と言うけれども、それは私の内側から見た私ではなく、他人が外側から見た私、また私が他の幼児を見て、そこから類推した私についての記述である。

* 子供期の私については「覚えている」と言いはする。しかし後になって、「あの時は実はこういうことだったのだ」と考えて言っている（子供の時に、自身について把握したことの記述ではない）。特に言語の習得についての記述は「覚えていない」～「覚えている」の過渡期であり、後から考えたことという断り書きが記述の立場を自覚していることを示す。 et memini hoc, et unde loqui didiceram, post adverti.

幼児～子供の区別はことばを話すかどうかに基づく（山田註 p71.(4) 参照）

non enim eram infans, qui non farer, sed iam puer loquens eram.

従って、言語の習得ということがこの時期においては重視される。さらにアウグスティヌス全体から言っても『告白』そのもののありかたからいっても重要な点になるだろう。

成長の回顧とともに、子供時代の罪についても言及：

神自身の内ではなく、被造物たる自分とそれ以外のものの内に、voluptates,
sublimitates, veritates quaerebar, ということにおいて罪を犯した (I,xx,31)

第2巻 青年時代

哲学：真理の探求 and 幸福の探求

¹神の恩恵と人の自由意志に関する論争、ペラギウスは人は善行によって救われると主張。

2.3 マニ教

アウグスティヌスは告白でマニ教を批判している：

veritas, veritas というが、どこにも真理ない。

elementi mundi

についても嘘をいう。哲学者のほうが真理を語っているというのに。

マニ教の教え 父なる神は至高の光であって近づきたい。子なる神はそより発して、日と月の光の内に住む。聖霊は大気の中に偏在。

神は光輝く無限の corpus、私はその一片 (frustum de illo corpu) と思っていた²。

マニ教は、本来ゾロアスター教に由来。光と闇の二元論。世界は光と闇の対立する場。やがて光が闇を征服する。善は光に属し、悪は闇に属す。魂が肉体の内にあるのは、光が闇の内にあるようなもの。人にとって救済されるとは光りなる魂が肉体から救い出されること。キリストは救済のためこの世に来た「光の子」であって、肉体は仮の姿。旧約の神はユダヤ人の拝む悪魔であり、新約の神とはかかわりない。この創造された世界がそもそも悪。

.....これはつまりグノーシス主義の一型である。魂は肉体の内にあることによって非本来的となっている。魂は光であって、究極的存在たる光と実は一つ。

悪の問題 悪を善の欠如として理解しない。マニ教はキリスト教を「悪はどこから生じるのか、神が万物を創造したのなら、悪もまた神が創ったことになるではないか」と攻撃する。

悪の問題は後の Aug. にとって大きい。(VII,i—vii)

Aug. は存在するものはすべて善いという認識をやがて持つに至る。(VII,xii,18)

2.4 新プラトン主義

*これまでのところでも同様であるが、本資料は講義のための資料であるため、以下の部分は特に、ラテン語の引用だけであることが多い。しかし、まあ邦訳を調べれば大体わかると思う。

新プラトン派に出会う

まえの探求の状態：

quaerebam te foris a me et non inueniebam deum cordis mei (あなたを私の外に探し、私の心の神を見出さなかった)

ここで、新プラトン派の書物を読み、聖書に近いことが書いてあるのを見出す (VII,x,16)。

(それらの書物から) 自分自身に立ち返るように勧められ自分の内奥に入っていった

(ad monitus redire ad memet ipsum intravi in intima mea ducete et ...)

私は入って行き、魂の眼のようなものによって、その魂の眼を越えた所、精神を

越えたところに不変の光を見た (intravi et vidi qualicumque oculo animae

²ここで神

は空間的に延長した物的な存在、輝かしいかたまりと考えている。精神もまた物体であり、空間的広がりがある。

meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem
incommutabilem)

ただし、それは肉眼によって見られる普通の光ではない。

私の内で、私を越えて、あなたにおいて プロティノスにおいては、一
者から発した魂は自己の内を辿ることによって、根源たる一者と合一し、一者そ
のものとなる。Aug. においては、自己自身に戻った魂は、自己の内奥に、自己を
越えた所に神をみる。

cf. ubi ergo te inveni, ut discerem te, nisi in te supra me. (X,xxvi,37)

物体の美しさについて、またこうあるべきだとの判断について、その根拠を求め、
可変的精神の上に不変で真実で永遠の真理を見出した (inveneram
incommutabilem
et veram veritatis
aeternitatem supra mentem meam commutabilem) (VII,xvii,23)

内への歩みは段階的である：

¹ a corporibus ² ad sentientem per corpus animam,
³ ad eius interiorem vim³, cui sensus corporis exteriora nuntiaret,
⁴ ad ratiocinantem potentiam, ad quam refertur iudicandum, quod
sumitur a sensibus corporis; **だがこれもまた in me で可變的**
⁵ ad intelligentiam suam et abduxit cogitationem a consuetudine,
.....,
⁶ ut inveniret, quo lumine aspargeretur,
unde nosset ipsum incommutabile et
pervenit ad id quod est⁴ in ictu trepidantis aspectus. (VII,17)

証明説 光を注がれ、不変のものは可変のものに優るとさげぶ——光によって
不変なもの自体を知る；存在するものを一瞥する。

2.5 時と永遠

* 以下は、清水著『医療現場に臨む哲学』（勁草書房 1997）第 8 章 3 節からの抜き書きなので、アウグ
スティヌスに必ずしもきちんとしたがってはいない。清水が理解したアウグスティヌスのエッセンスとい
うものとして、資料にしていきたい。

³ 5 つの外感の所与を統一する
のみならず、これらの感覚を感覚する能力；自分が感覚しているということ
を感覚し、自覚する能力。

⁴ id quod est : 存在するもの。cf.
「我は在りて在るもの」

2.5.1 過去・現在・未来という時の流れを見つつ生きる人間

私たち人間は過ぎ行く者である。「いずれ死ぬ」ということは、いつかは少なくともこの世界の中には存在しなくなるだろう、この世界の中でのもろもろのものと私との絆は断ち切られるだろう、ということである。そういう意味で私はこの世界を過ぎ行くのである。それはまた、その過ぎ行く間の一瞬一瞬の出来事が私の前に現れ、過ぎ去っていくということでもある。私たちはそうした時の流れを意識し、時が流れるということは、自らが過ぎ行く身であることに他ならないと思って、悲しむ。

だが、そのように自覚するということが人間にできるのは、人間が時に流されてあるだけの存在ではなく、ほんのわずかながら時を越えたあり方をしているからにほかならない。そのことを指摘したアウグスティヌスの思索(『告白』第11巻)を下敷きにして、考えよう。

私たちは過去・現在・未来という時の区別をし、それに従って私たちのあり方を把握している、ということを実態として認めるところから始めよう。さて、過去とはどういうことだろう。過去は「過ぎ去った時」であり、過去の出来事は「生起し、過ぎ去ったこと」である。ということは、過去という時はもはや存在せず、過去の出来事ももはや存在していない。また未来は「未だ来ていない時」であり、未来の出来事は「未だ生起していない、今後生起するであろうこと」である以上、未来という時は未だ存在せず、未来の出来事も未だ存在していない。これらに対し、現在は「現に私の前にある時」であり、現在の出来事は「現前していること」であるのだから、現在のみが存在する時であり、現在の出来事のみが存在している。

だが、その現在は「存在する」といっても、ほとんど「存在しない」と同じ程の存在だ、という見方もできる。現在は未来と過去の境界線であって幅がない、と見る事ができるからである。昨日は過去で明日は未来であるのに対し、現在は今日である——3時は過去、5時は未来であるのに対し、現在は4時である——4時34分は過去、4時36分は未来であるのに対し、現在は4時35分である——4時35分23秒は過去、4時35分25秒は未来であるのに対し、現在は4時35分24秒である——さらに4時35分24秒として、過去と未来から区別した現在の1秒間も細かく分けて、同様のことを次々と言うことができよう。つまり、このような見方からすると 現在 は結局、時の流れを直線として表した場合の直線上の、未来と過去の境界の点に他ならないことになる。

このような 幅のない現在 に関しては、ただ「何かがある」ということが言えるだけであって、「何かが生起している」、「何かをしている」といった動きを語ることはできない。例えば何かが動いているとしても、幅のない現在としてのある瞬間にあることは、「その何かは空間上のこれこれの位置にある」ということだけであろう。言い換えれば、もし私たち人間が、時の流れをそのようなあり方に即して把握するのであれば、私たちは一瞬毎に、「これはかくかくの位置にある」ということを把握するのみで、「動いている」ということを把握することはできないことになる。

幅のある現在 しかし、私たちは例えば時計の振り子が「現在動いている」ことを把握する。それは私たちにとって現在は幅をもった時だからにほかならない——振り子がある瞬間に a という位置にあり、次の瞬間には a とはすこしずれた a' にあることを共に同時に把握するからこそ、「動いている」と把握できるからである。

また、言葉を聞いて理解するという場面を考えよう——私が「窓を開けて！」とあなたに語りかけたとする。その場合「マ・ド・ヲ・ア・ケ・テ」という六音節の音が鳴り響き、あなたはそれらの声を聞くだろう。「マ」という音が鳴り響き、あなたの耳に聞こえた時、「ド・ヲ・ア・ケ・テ」という音は未だ鳴り響いてはいない(未だ来ていない)。「ド」が発せられ、聞かれた時、「マ」は既に過ぎ去り、消えてしまっており、他方「ヲ・ア・ケ・テ」は未だ来ていない。そのようにして、次々と音声が鳴り響き、消え行き、遂には「テ」が発せられた時には「マ・ド・ヲ・ア・ケ」はもはや過ぎ去ってしまっている。だが、それを聞いたあなたには、たとえ短い時の間だとしても「マ・ド・ヲ・ア・ケ・テ」という六つの音声が共に同時に現前しており、あなたはそれを「窓を開けて！」ということだと把握する。あなたは、私が今「窓を

開けて！」と語ったと理解する。それは、聞き手のあなたにとって、また語り手の私にとって、ほんの少しの幅でこそあれ、幅のある時間が 現在 であるからにはかならない。また、「マ」・「ド」・「ヲ」・「ア」・「ケ」・「テ」のそれぞれはそれ自体としてみれば、次々と鳴り響き、消えて行くものであって、決して暫しの間といえどもとどまって共にあることはない。だが、それらは私に対しては暫しの間現前してとどまり、かつ共に（一緒に）ある。

このようにして「現在何かが起こっている」ということが把握できることが、過去や未来の把握を、そして私の人生全体の流れを把握することを可能にする条件でもある。先に、過去や未来は存在しないと言った。それらは「もはや存在しない」「未だ存在しない」からこそ、過去や未来なのである。だが、私たちは過去や未来について考え、語る。それは過去についての把握（いってみれば記憶）、未来についての把握（いってみれば期待）は私たちにあるからだ。その意味では、過去や未来は私たちの内に存在している、ということができる。過去が過去なのはそれはかつて現在であったからだ。未来が未来なのはそれはやがて現在であろうからだ。過去の出来事のある出来事として把握できるのは、それが現前していた時点で私が居合わせていたとすれば、それを幅のある現在として把握できたであろうからだ——未来についても同様のことがいえる。もし幅のある現在を把握するあり方を私たちがしていないとしたら、たとい過去についての記憶があったとしても、動きというものを把握できないだろう。ある物体が過去の時点 t_1 に a_1 という位置にあり、時点 t_2 に a_2 という位置にあった、と記憶していたとして、そこから「動いた」ということが言えるためには、 t_1 と t_2 を共に同時に現在把握することができなければならない。二つの時点の二つの出来事を共に同時に把握するためには、その把握する働きを行う現在に幅がなければならないのである。したがって人間にとっての現在に幅がないとしたならば、時の流れということもまた、人間は知らなかったであろう。

時の流れをわずかではあれ越えた存在である人間 こうして、人間にとっては 幅のある現在 が現前するということは、人間が時の流れにただ流されるのみの存在ではなく、時の流れをほんの少しとはいえ越えた存在であることを意味する。以上で指摘したように、もし私たちにとって現在が未来と過去の境界であるに過ぎないとしたら、私たちは凡そ動きというものを把握できず、したがって生成消滅を知る事もないであろう。かつて生まれ、やがて死ぬというような意識もなく、時の移り行きに従って移ろい行くのみであったろう。だが私たちは時の流れを意識し、幅のある現在を把握する存在である。そして、そうであればこそ、自らのこしかたを反省し、時に悔い、行く末に希望をいだき、あるいは不安に思うことがある。また自らが 過ぎ行く身 であることを知って悲しむ存在でもあるのだ。

永遠 以上のような考えの下敷きとなっているアウグスティヌスは、このようなあり方を 永遠 と対比させている。永遠 とは、無限の時間のことではなく、時の流れのないあり方のことである。それは 時の流れを限りなく越えた あり方として理解できる。アウグスティヌスは永遠においては「全てが共に同時に (simul)、かつ常に (sempiterna) 現前している」という。私は、これを人間にとって幅のある現在が現前することと比べることによる説明だと解したい。すなわち、先に提示したように「マ・ド・ヲ・ア・ケ・テ」を「窓を開けて！」ということだと把握する際には、「マ」・「ド」・「ヲ」・「ア」・「ケ」・「テ」の六音節が「共に同時に」そして「暫しの間とどまって」現前するのである——そのようにして人間はわずかに時の流れを越えた存在なのであった。これに対して、永遠においては、「六音節」ではなく「全てが」、また「暫しの間」ではなく「常に」である。つまり、アウグスティヌスに従って、ここで永遠というあり方をしている神を想定するならば、その神に対しては、世界の初めから終わりまでが、「共に同時に」そして「常に」現前する。つまり、人間が「マドヲアケテ」という発話を現在の出来事として把握するように、神は世界の初めから終わりまでの全てを現在のこととして把握するということになる。そのようにして、永遠というあり方をしている存在は、時の流れを限りなく越えた存在だということができる。

アウグスティヌスの永遠理解において注目すべきは、彼が時の流れの中で意味を持つ語を使いながら、時の流れを限りなく越え、時の流れが否定されるあり方を提示するという道行きをしている点である。「共に (同時に)」は、事柄の生起の時間的前後関係を語る語のひとつであって、あるものはある別のものに時

間的に先立つのでも、遅れるのでもなく、両者の生起の同時性を示す。だが、全てが「共に(同時に)」だとなると、もはやどこにも先立つことも遅れることもないのである——そういう仕方、「全てが共に(同時に)」は、時の流れを打ち消す。また「常に」は、時の流れのなかで、あるものはほんの少しの間持続するだけであるのに対し、他のものは長い間持続するという多様性があるなかで、「ずっと持続する」ということを示す。だが、全てが「常に」であるならば、長い時間、短い時間ということがそもそもなくなってしまうのであって、そのようにして時の流れが打ち消されるのである。時の流れを限りなく超越するという仕方、永遠のあり方を提示するという方針が、このように時の流れを前提する用語を使って、時の流れを打ち消すあり方を語るというやり方に反映している、と言えよう。

2.5.2 永遠の視点から見れば全ては過ぎ行かない

さて、アウグスティヌスを下敷きにして、時と永遠を巡る思索をしたのは、この論点がかつて生まれ遠からず死に行く私——過ぎ行く私——をどう把握するかということに深く関わっていると思うからである。

人間は過ぎ行く存在である——そのように見るのは見ているのが過ぎ行く私たちだからである。永遠というあり方をしている超越者を何らか想定するならば、その超越者から見れば「全ては共に(同時に)そして常に現前している」のであって、私もまた過ぎ行くことなく現前している。それどころか私たちのこの一瞬一瞬が全て過ぎ行くことなくとどまっている。永遠の存在の前に現前することによって、過ぎ行く存在が永遠に与かる、ということである。まさに、瞬間もまた永遠であるのだ。

したがって、それぞれの人生には長短があって不公平であると思い、また、誰もがやがて死に、別れなければならないと悲しむのは、過ぎ行く人間の過ぎ行く視点に立っての思いなのである。だが、永遠の存在の視点からは、全ての人間の生はそれぞれの位置にとどまって永遠なのである。

このことに思いを馳せるならば、死後の永遠の生に希望を抱くという仕方の宗教の教説は、自己反省を迫られるだろう。ことに「もし神が私たちに永遠の生を約束されなかったとすれば私たちには希望がないが、現に神は信じる者に死後の永遠の生を与えてくださる(だから私たちは希望をもってこの生を終わることができる)」と信じ、考える信仰者には、私はこう言いたい。

「死後の生を信じるのは勝手だが、死後の生が希望の拠り所になっているというあなたたちの信仰は、実は神に対する不信の表明なのではないのか。なぜなら、もし本当に永遠の神を信じるならば、こう言うはずだからだ。——私の生がたといほんの僅かな、瞬間のものであるとしても——実際そうなのですが——私の生はあなたの目からみれば永遠にとどまっており、あなたの目に私は永遠に見られています。ですから、私は、ほんの瞬間の生であっても、あなたによって生かされ、存在し、そして輝けたことを感謝します。あなたの前に生きることが出来たことを喜ぶ私は、どうしてこれ以上、死んだ後も生きたい、存在したい、などとあなたに願うでしょうか。この生ではまだ不十分だ、などとあなたに訴えるでしょうか。ましてや、この生があなたに永遠に見られていると分かったからには、それで私は満足です——と。」

——あなたの話は、永遠の超越者を想定した限りでのことだろう。

さしあたってはそうである。だが、ここから進んでさらに次のように考えたいのである。永遠 という視点から私を見る思索をし、永遠という視点に立つ超越者を想定し、その立場から見れば私もまた過ぎ行かないのだと論じた際に、そうした想定をしつつ考える私はどのような視点に立っているのか、に目を転じよう。——永遠という視点を想定する私もまた、ある仕方、永遠の視点に立っていることになる。そうであれば、超越者を想定しなくても、私が今時の流れを越え、これを鳥瞰しているということから、同じことを語り得るのではないだろうか。たしかに私は現に世界の初めから終わりまでの(初めや終わりがあったとして)全てを見ることなどできない。私にできるのは、「世界の初めから終わりまで」という概念を理解することに過ぎず、私がおの際に想い描くのは、時の流れの空間的な表象であり、いわば横軸を

時間の経過とするグラフのようなものであろう。——グラフの左の端には世界の始まりが(神による創造であれ、ビッグバンであれ)、そして右の端には世界の終わらないしは適当な未来の時点が置かれる。そしてその上の私の位置に点を打つ——このような仕方では世界を時の流れに沿って鳥瞰するとき、私は私の視点を永遠の位置に置いており、その位置からこの私の存在を見ようとしている。

そのような視点に立つ時、天文学的時間の流れの中で私たちの生は皆、一瞬輝いては消える線香花火の火花に過ぎない。人生長かろうが短かろうが、皆一瞬の火花である。だが、一瞬しか瞬かないということを見返せば、一瞬たりとも輝いたということでもある。そして無の闇の中に一瞬たりとも存在が輝いたということ——このこと自体は永遠にとどまる。時の流れを鳥瞰する私の前に、点として打たれた私の生は過ぎ行かず、とどまり続けている。

考えてみれば、私たちは空間の広がりの中でも、点として存在しているに過ぎない。それでも誰も、自分をもっと広がった存在であること、もっと言えば世界全体に普く広がった存在であることを望み、そうでないことを悲しみはしない。人間とはこうした点的存在に過ぎないことを事実として受け入れ、当然としている。そして、点同様であれ存在していることを喜んで——そして悲しんで——いる。つまり私が言いたいのは、空間の広がりにおけると同様のことが、時間の広がりの中でも言えるのではないか、ということである。

こうして私は、ナウシカに倣って「いのちは闇のなかのまたたく光だ」⁵と叫ぶ。自らの思惟によって時の流れを鳥瞰する視点に立ち、瞬く間のほのかな光であると自らを見、また自らの傍らで瞬いている他者を見ることが、そこから再び、過ぎ行く者としての視点に戻って、悲しみに裏打ちされた喜びを共にする仲間として傍らにある者を受け入れることの始まりとなろう。時には対立し、いがみ合う者同士が、いたり合う者となる可能性を拓くであろう。

私たちは共に過ぎ行く者であり、死に向かう存在である——だが、「過ぎ行く」ということが「現に共に存在している」ことを、「死に向かう」ということが「共に生きている」ことを指し示している。共に死に向かっていることが、生ある者の共同の根拠になる。闇の中に今瞬いているという自覚こそが希望の源である。希望は未来に対してあるのではない——希望は現在の自らの存在をそれとして肯定し得る途にこそあるのだ。

3 古代の終わり

3.1 ボエティウス

Anicius Manlius Severinus Boethius c.480- 524/5

ローマ時代末期の政治家にして哲学者。「最後のローマ人にして最初のスコラ哲学者」と称される。ローマの名家に生まれ、おそらくはアテネにて最高度の教育を受け、若くして自由学芸全般に亙る学者となる。東ゴート族の王テオドリックの下で重用され、30代で執政官に選ばれ、さらに宰相を務めもするが、テオドリックがアリウス派であり、かつ東ローマ皇帝と緊張関係にあったという状況下で、陰謀の疑いを受け投獄され、やがてパヴィアで処刑された。

彼の学問上の業績は哲学と神学の双方にまたがっている。哲学に関しては、政務のかたわら、アリストテレスの論理学書およびポルフェリオスの『アリストテレスのカテゴリー論入門』のラテン語訳と注解、またキケロの『トピカ』の注解を完成し、またこれらに基づく論理学関係の著作をなすなど精力的な活動をした。これらの翻訳、著作は西欧中世に伝わってその哲学的思索に決定的な影響を及ぼすこととなった。また音楽等自由学芸関係の教科書的著作も知られている。神学に関しては『三位一体について』等小論が5篇知られており、その論理学の方法や術語を神学上の問題に適用して理解を求める試みはスコラ哲学の模範となった。

⁵宮崎駿『風の谷のナウシカ』7

彼の主著『哲学の慰め』De Consolatione Philosophiae は獄中で書かれ、散文と詩文の交替という形式で著されており、不当に苦しむ義しい人である著者(ないし一人称で描かれる主人公)に人格化して描かれる哲学(ないし女神フィロソフィア)が現れて、対話を通して様々な仕方で神へと導くという内容のものである。そこで採られる議論はストア的および新プラトンのでありながら、明示的にキリスト教的ではないにせよ、宗教的色彩が全体を貫いている。同著もまた、西欧中世において、思想的にはもちろん文学的にいっても、最も広く影響を与えた書物のひとつである。(岩波『哲学・思想辞典』の原稿)

3.2 カシオドルスとイシドルス

未稿 カロリング・ルネサンス以降の中世哲学が使った資料として重要。両名については、辞典くらいは調べておくこと。